

筑前國續風土記 卷之十目錄

夜須郡 四十所

朝日村日照寺	二	村	安	野
屋形源	石櫃村	甘木町		
砥上神社	八並長者宅址	勝	山	
山隈山並原	東小田村	玉蟲大明神		
松延塘	長者町	未噲堤		
金銘水	千間溝	綠	松	
野町	栗田村	栗田八幡宮		
目配山	松	尾	老松大明神社	
三箇山	玉屋權現祠	阿彌陀峰		
秋月谷口	大神大明神	檜原村		
甘水村	長谷山村	婦夫石		
秋月	上秋月	切殘山		
江川	荷持村	古所山		
八町越				

筑前國續風土記 卷之十

貝原篤信選定

貝原好古編錄

竹田定直正校

夜須郡

日本紀を考ふるに、仲哀天皇九年春三月壬申朔辛卯に、神功皇后層そぞき増岐野に至り、則兵を舉あげて羽白熊鷲くまわしを撃うちて、是を亡し給ひ、左右に謂て曰、熊鷲を取得て我心則安しと宣ふ。故に其所を號なづけて安と云よし記せり。此郡の號爰なに起れり。後に二字に改て夜須と書けるならし。此郡は南は筑後國にさかひ、東南は下座に連なり、東北は嘉摩穗波に山を隔て、續き、西北は御笠に隣となれり。境内に山川有て其利少からず。土地肥沃にして米穀多く。順和名抄に夜須郡は東西とあり。今も栗田より東を東郷と云、西を西郷と稱す。和名抄に出る所、此郡の郷の名六あり。

中^{なかつ}屋^や 今砥上村の邊を
中屋郷といふ 馬^{うま}田^た 今も村の名
に残れり
賀^か美^み雲 提 川^{かは}島^{しま}

今稱する所此郡の村の名

曾根田村 玉蟲村 曾根田村
之内 坂根村 同上 朝日村 二村町 朝日村に
屬す
高原村 朝日村
之内 吹田村 檣村 吹田村に
屬す 甘木村 古は甘木
町といふ
東小田村 福島村 東小田村
に屬す 凡町村 東小田村
之内 長者町村 松延村 砥^と上^{がみ}村
赤坂村 みむた 三牟田村 下町村 三牟田村
之内 篠隈^{しのかい}村
三並^{みなみ}村 やつみなみ 八波村 三並村
之内 勝山村 同上 四三島村 しやうじま
下村 四三島村
之内 屋形原村 同上 中牟田村 此村之内有
月領 石櫃村 中牟田村
に屬す 上秋月村 以下秋月
領 荷取村 上秋月村
に屬す 下秋月村
河内村 下秋月村
に屬す 江川村

野鳥村

長谷山村はせやま

千手村

女男石村

千手村に屬す

下淵村

甘水村あまうづ

白川村

甘水村に屬す

な檜原村

古は檜村といふ

隈江村

彌永村

依井村より

野町村

依井村に屬す

原地藏村

依井村之内

久光村ひさみつ

阿彌陀峯村

久光村之内

栗田村

森山村

栗田村に屬す

當所村たう

同上

三箇山村

古は三箇山村を五玉山村と稱し、檜木、桑の曲を合せて三箇山村といふ。五玉山村を獨三箇山村と稱し、檜木桑の曲を三箇山村の枝村とす。

檜木村

三箇山村に屬す。

桑曲村

同上 畑島村

前川村

畑島村之内

上高場村

たかは

山隈村

上高場村に屬す

大久保村

同上 高畠村

上高場村に屬す

下高場村

才木村さいき

下高場村之内

高田村

馬田村

上浦村

下浦村

甲場村かふは

下浦村之内

草水村さうづ

千代丸村

牛木村

菩提寺村

持丸村

古は入江持丸といふ

大塚村

以上七十二村

内 四十二 本村
三十 枝村

○朝 日 村 日照寺跡 十三塚

村中に朝日山日照寺と云寺跡あり。本尊は薬師佛也。是傳教大師竈門山にて作られし七佛の一なり。今は寺もなく、本尊もうせぬ。朝日村より乾の方に十三塚あり。南北にならべり。當昔は東西にも十三相並べり。然るを二村を立らるゝ時、東西の十三はくづれて今はなし。或云、近世大友家と筑紫上野介廣門大に戦し事あり。筑後の星野問注所^{もんぢうしよ}なども筑紫方に加り、山家邊にて戦しに、筑紫方打勝ちて、敵を千三百人討取。此時その首を一所に百づゝ埋て、塚を十三築かせ置しと云。され共此地にかぎらず、國中に十三塚凡十一所あり。又他國にもあり。然れば右の説はうたがはし。十三塚の説は、總論の内に記せり。

○二 村 此町西の端より原田村に通る大道あり

此村始はなかりしを、寛文の初年に立らる。此所に東西に十三塚ならびたるを崩して、町を立られし故、所の名をも始は十三塚と稱せしが、後に二村と稱す。初は町の南側は夜須郡に屬し、北側は御笠郡に屬せり。二村合て一坊とす。故に村の名とす。今は全く夜須郡とす。

○安野

東小田、四三島、鷹場、三村の間、七板原といふ廣き平原有。方一里餘あり。是則安野也。方一里許の間には田畠なし。其西北に東小田村の枝邑あり。福島といふ。又福島 of 西北に東小田村あり。是も安野の内にあり。此外に田畠なし。皆平なる野原なり。四三島の南、山隈野との間に川有て隔つ。山隈原とはつづかず、別の原也。四三島の川は、彌長より出て、筑後の方に流る。

萬葉集四

君がためかみしまち酒やすの野に

ひとりやのまん友なしにして

右太宰帥大伴卿、贈^ニ大貳丹比縣守卿遷^{スルニ}任 民部卿^ニ歌也。かみしとは、かもせしなり。酒を作るをいふ。

○屋形原 下座郡に屋形原村有。それにはあらず。

四三島の境内に屋形原と云所あり。爰に大なる古塚あり。是を屋形の墓と云。屋形といへるは、むかし富貴人の居たりし所にや。其姓名しれず。

○石櫃村

石櫃と松延との間に、筑後の松崎に行大道あり。

中牟田村の枝村也。中牟田村は秋月領に屬せり。石櫃村は福岡領に屬す。村中に天神の社あり。其初此社の神體を、石櫃に納て土中にうづみ置、是を祭りしと云。其所也とて、民屋の後に小高き塚あり、故に村の名を石櫃といふ。大道筋に少ばかりなる町あり。是を石櫃町と云。

○甘木町

國中にて、民家多き事。早良郡姪濱につげり。町數十五町、民戸數五百廿三軒、人數三千三百七十七人、馬牛百七十三疋あり。是延寶四年にかぞふる所なり。古より此所にて

毎月九度、市たてり。今におゐて絶す。

二日、四日、七日、十二日、十七日、廿二日、廿七日、

四日、十七日、廿二日、廿四日、廿七日、筑前、筑後、肥前、肥後、豊前、豊

後、すべて六箇國の人のより來る總會の所にて、諸國に通ずる要路なれば、商人多く集り交易して、各其利を得る中につゐて、福岡、博多、姪濱より魚鹽多く持ち來りてあきなふ。豊後、筑後、肥前の内には、海味おほくは是より買ひゆけり。凡博多より甘木の間、人馬の往來常にたえず。東海道の外、此道のごとく人馬の往來多きはなしといへり。信濃路、播磨路などは、中々是に及ばず。

○安長寺は甘木町に有。禪寺濟家也。甘木山と號す。開山圓鑑禪師といふ。應長の頃開基せりとぞ。今は承天寺の末寺也。寺内に地藏堂あり。地藏佛は満米上人所作也と云。甘木遠江守安長の父安道、大和國矢田地藏を信ず。彼地藏は、満米上人安置する所の靈佛にして、元亨釋書満米傳に詳也。安長痘瘡をうれへ、醫療驗なかりしかば、安道矢田地藏に祈り、

靈夢を感じて、安長の病たちまち快愈す。是に依て其領地甘木に安長寺を建、地藏佛を安置すと云。故に今に至りても、痘瘡をうれふる者、此地藏にいのり、又此寺より符をあたふ。秋月種實が、秀吉公に捧げし檜柴ならしはと云ふ名物の碾茶壺ちやいねは、もとは肥州平戸の松浦民部大輔所持しける。或時松浦氏貧困にして、財用ともしかりしかば、此茶入を使に渡して、秋月種實に遣し、代金百枚に販ひきがんと云。種實古器もてあそを翫あそびければ、得まほしく思ひ、金を尋るに、三十枚はありしか共、残る七十枚は、亂世の時上方に遠ければ筑前、筑後、豊前の富とみける者に求めけれどもなかりけり。さらばとて京都に人を上せ、金を求る其間、彼檜柴の茶入をば此地藏堂に籠置、松浦の士三人、秋月の士三人にて晝夜守りける。七十枚の金を求下り、都合百枚、地藏堂の庭にて金を鑄い崩くづして、松浦氏より來りし平戸の士にわたして、檜柴の茶入を請取けり。是は其比九州にて、金の眞偽しんぎを見知る者な

かりし故なり。

○柳原正二位大納言墓、甘木村の河原に有。天正の比にや、柳原大納言と云人此所に来り、尺八を吹て徘徊せられしとき、小早川隆景の監吏めつけも亦尺八を吹て、國中を廻りけるが、大納言何某監吏めつけが尺八を押へて取られしを、隆景卿聞て忿り、此河原に磔はりつけにせらる。所の者共墓を築置けるよし里人いへり。此時高官の人此國に下り住める事、さも有べしともおぼえず。但狂亂喪心きやうらんさうしんの人也しにや。且隆景謹厚きんこうの人なるに、妄みだりに高官の人を磔はりつけにせられし事もいふかしければ、何れも信じ難し。若あふれ者の來て、僞て大納言と稱し、狼藉らうぜきせしをかくはせられしにや。

○砥上神社

砥上村にあり。此邊中屋なかつの郷がうなれば、中屋權現と稱す、祭る所の神三座、中間は、神功皇后、東間、住吉大神、西間、八幡大神也。御社は村の中にありて南に向へり。社家者の云傳へには、神功皇后新羅を討給

はんとて、先諸國の軍衆を此所まで招寄たまひ、中
やど也と宣ひし故、仲屋と號す。さて軍衆に命じ、
此所にして各兵器をとぎみが、かせ給ふ。故に砥上
と號すとかや。かゝる遺跡なればとて、後世に至り
て 神功皇后を祝ひ祭り奉るとなん。古は大社なり
しと見え、宮所廣く物ふりて、御池御橋もよのつね
ならず。むかしは正月十五日に祭禮あり、神樂を奏
し、射禮を行ふ。又九月廿四日は、恒例の大祭にて
神幸あり。其時御輿を休めし所、御社の南六町ばか
りに、森木とて島三残り。御旅所は、東小田村の
内、福島と云所也。御社より十八町南にあり。其外さまぐの儀
式侍りしとかや。此兩度の祭料に、秋月氏より二町
餘の神田を寄附せらる。今はかゝる恒例も絶果、此日
にかた許なる祭禮を取行ふのみ也。社より北に當り
て、鹽井川瀧あり。村より良なる山をば、砥上の嶽
と云て高山也。此所に石室に砥上權現鎮座あり。是
上宮也。婦夫石めをととて大石二あり。又砥上岳より二町

許り下に、かぶと石、からふと石など云石あり。

吹田、赤坂、砥上、三牟田、曾根田の五村ともに、砥上岳の下にあり。

○八並長者宅址

三並村の下、八並^{やっなみ}と云所にあり。明暦のころまでは礎猶ありしを、堤を築く用にとりて今はなし、上座郡宮野村にも、八並長者の宅址あり。長者と稱せしは、さばかりの富人にてありけるにや。其時代姓名詳ならず。此宅のあとの畠に、焼米の石に成たる多し。

○勝 山

三並村の枝邑に勝山と云所あり。其谷の奥の山に大竹多く生ず。寛文の初より、此所の竹をとりて、國君の旗竿に用ひらる。毎年十二月に五十本充是を取。

○山 隈 山 井 原

四三島の東南に山隈山あり。山隈原あり。山上に城址あり。山上を以て筑前筑後の境とす。本丸は筑後干潟村に屬し、南北十間、東西七間あり。西の方二

の丸は、筑前筑後に分れ屬す。内に境塚あり。東の三丸は、筑前四三島に屬す。山は筑前の地多く、筑後の地すくなし。城址のめぐりの坂に、たてほりて、上下に通じてほり通せる小ほりいくらもありて、高下あり。山上に山隈權現の社有。石の叢祠也。ほくら彦山權現を勸請すといふ。祭禮二月十五日、此社は筑後に屬せり。此山筑後にては花立山と云。筑後干潟村は山の西にあり。花掛村は山の南に當る。何れも筑後也。近く山の北に、此郡の砥上村見ゆ。むかしに當る山隈原は、山の四邊方二里餘なる平原也。筑前筑後に屬せり。筑前の山隈村は、初はなかりしが、元和七年に始て立つ。上高場村に屬す。

○東小田村

此村の西南近き所に峯堂と云所あり。是はむかし寺ありし所と云、古塚多し。其西邊に塚本とて大塚あり。又方二三間ある古塚多し。むかし此西大野原、大原邊にて、少貳菊池合戦有し時、死骸をうづめし塚

なるべし。菊池肥後守武光肥後よりよせ來りしを、
太宰少貳大軍にて出向ひ、山隈山に陣し、筑後の内
小郡の東、大野原にて合戦す。今の太保村の原を大
野と云。小貳うちまけ、太宰府の居城に引退く。其
時大勢討れし死人を、此所に埋めし由聞ゆ。東小田
より小郡の邊、大野迄一里半あり。其間に横隈、力
武、太保村あり。皆筑後三原郡なり。大野原今は大
保原といふ廣原なり。或曰、小貳と菊池と合戦せし
所、東小田の西一里、大保といふ所、是太平記にしる
せし大原なりと云。小郡原より打つゝきて太保村あ
り。其日度々軍有しかば、大野原大原所々にて戦ひ
しなるべし。村より南の方四町ばかりに聖塚とてあ
り。又東の方六町ばかりに夫婦墓とてあり。此邊に
小き塚數多くあり。

○玉蟲大明神社

曾根田村の内玉蟲といふ所にあり。神體は男女の二
體なり。民俗之を那須與市夫婦をまつる所といへり。

いぶかし。

○松延塘

松延村にあり。水面を田につもれば、八町ありといふ。大なる塘也。

○長者町

馬驛にはあらず

此町は長政公入國の後立らる。三並村の下、八並長者が居たりし宅の邊なるゆへ、長者町と號す。長者宅の事は前にしるせり。此所より秋月へ二里、博多に六里あり。

○未噲堤

畑島、森山、三並、三村の塘也。水田にそゞぐ水を貯ふるつゝみ也。土民は、八並長者の味噲粕を捨し故、此名有といふ。又その土堤どての土の性あしく、味噲のごとくなればとて名づく共云。塘の内、長二百間、横の廣き所百間、或五六十間あり。

○金銘水

當所村の内、大道の端にあり。是清冽れつなる名水なり

しと云。今は其所道と成て、水は出ず。當所村大道の端なる小き山の上に墓あり。村民は是を大磯の虎が墓と云。此地に虎の墓あるべき故なし。世俗の云傳ふる事妄誕多し。信すべからず。されどもいかなる故も有しにや、いぶかし。備後國世良郡小泉村に寺あり。その堂前に古墓あり。是又相傳へて大磯の虎が墓なりと云ふ。

○千間溝

彌長村の下より、上鷹場の村際まで、千餘間ある溝也。水通ずる所也。むかし上より下に水を引て、開田をせんために掘れりと云。

○緑松

上鷹場村の東の境、たか上と云所に、緑松とて松一株あり。久光村の境内也。里俗にいひ傳ふるは、百合若大臣の緑丸と云し鷹、玄界島より飛來、此松の上にて羽を休めしと云。鷹場と云、鷹上と云名あれば、附會せしにや。いぶかし。

百合若大臣の事、志摩郡の卷に記す。

○野 町

此町は、秋月町より西の方、筑後の松ヶ崎に通る馬次の宿也。秋月より二里あり。野町より西の方、松ヶ崎の驛へゆくに、其間一里六町あり。是より筑後へも肥前へも通る大道なり。秋月と野町の間彌永町あれど、馬驛には非ず。野町は、むかし野原にて町はなかりしが、黒田長興此所を馬驛とせば宜かるべしとて、寛永十四年に始て町を立たまふ。依井村の枝村なり。

○栗 田 村

栗田村は、和名抄に出たる夜須郡の郷の名也。始は森山、久光、當所、栗田の四村一邑にて、すべて栗田と號す。長政公入國の後、栗田、久光、二村に分る。長興の時、栗田の内より森山わかる。其後森山の内より當所村わかる。すべて四村となる。今も森山、當所二所は栗田の枝村なり。栗田村は大邑にて佳境也。

○栗田八幡宮

栗田村にあり。祭る所の神三座、西、住吉大神、中、八幡大神、東、神功皇后也。むかし神功皇后、羽白熊鷹と云強敵を討んとて、此所を經過し給ひし地なれば、かく此所に祝ひ祭り侍にや。社家の説には村上天皇天徳四年八月、左大臣藤原重直と云人、始めて此社を建立あり。佐々木左近重綱、横山右衛門重貞兩人をして、兩宮司とせられ、神領五百町寄附ありと云。九月廿五日祭あり。むかしは此日神幸あり。今猶其行宮の森あり。御社より十町ばかり南にあり。又御社の前に楠の古木あり、其大さ五圍あり。山上に岩戸あり。神功皇后を祠り奉りし所といへども、今は御廟なし。是を上宮と云。

○目配山

栗田村上宮の東なる山を目配山と云。山上に方一間ある石あり。里人の説に、此石に神功皇后坐したまひ、四方を見をなはしたまひし故、目配山と號す。

○松 尾

栗田村上宮の北十町許に松尾と云所あり。因て思ふに、日本紀皇后紀に、熊鷹を撃たんと欲して、樞の宮より松峽宮に遷たまふ事あり。栗田は則神功皇后留り給ひし地なれば、日本紀に松峽宮に遷たまふとあるは、もし此地にてもあるべきか。されども竈門山僧の説には、竈門山の西のふもと、松の尾是なりと云。

○老松大明神

栗田村の枝邑寺家と云所にあり。九月廿五日祭あり。天正六年の冬、秋月種實、筑紫廣門、御笠郡岩屋の城下におしよせける時、秋月氏の手より、あやまりて天満宮の邊の小屋に火を放ちしが、本社にうつりて忽灰燼くわいじんと成ね。社人等御神體を守りて、栗田村にのがれ、其旨を種實に訴ふ。種實大にいかりて、火を放ちたる者一類まで刑殺せらる。事は三笠郡天満宮の條につまびらかなり。種實天神の祟たたりをおそれて、神前の祭器並幢十七流を寄献

して、其罪を謝し奉らる。則此所に社を立、宰府大神の神體をうつし、社人をも招寄せらる。寺家と云所五百石の地なるを、則御社に奉らる。天正十九年に、小早川隆景宰府の御社建立有し時、此地より御神體を宰府に移し奉らる。其前十四年の間は、此所にかりに鎮座し給ひぬ。御歸座の後に、此所には老松大明神を祝ひ祭りしなるべし。社前に神地あり。宰府の社僧大鳥居小鳥居以下、此所に來り住せし故、其宅の址残り。

○三箇山 玉屋權現祠

穂波郡内野村の川上、狹き谷の中に三村あり。桑野曲村・五玉山村、櫛木村也。三並村、曾根田村よりは山を越ゆく。内野村より三十町ばかり上に桑野曲村あり。其上半里に五玉山村あり。櫛木は又其奥にあり。五玉山村を以て本村とし、櫛木、桑野曲は其枝村に屬す。三村をすべて三箇山とし。那珂郡に五箇山、御笠に四箇畑あるがごとし。凡三村は、他村に

遠くはなれ、深山幽谷の内に在て、人の行通ふ事稀なり。冬は雪ふかくして甚寒し。

○玉屋權現祠、五玉山村に有。村より五町ばかり山間にあり。社の下谷川の傍に、むかし五の玉石あり。近年は五ながら社内に納む。其大さ徑二尺ばかり、五玉ともに同じ大さにて、其形かたちまるくして玉のごとし。此玉石ある故に五玉山村と號す。此社は彥山一體の神にして、彥山寶滿の山伏修行する所なり。兩山の山伏入峯の道筋也。社の下なる谷川の傍に大石二あり。其挾間はさまに清水流れいづ。民俗の説に、懷妊の婦人此水をのめば、産し安し。故に此村に難産及産死の婦人なしと云傳ふ。近來は其名やうやく聞えて、遠近の府君士大夫庶民に至るまで、其靈驗を信じ、此水をくませ、孕婦に飲ましむる人多し。汲に來る人は、社に錢をさゝげ、水を筒に入て持歸る。

○三箇山の西南に長き山有。則夜須郡三並、曾根田、砥上などの東北にある山也。此山の西北に高山あり。

山家町の方に近し。夜須、御笠のさかひなり。神功皇后の通り給ひし所也とて、神おりたうげと云。其東南につゝきたる山の峯すぢに、つゝらをき、めくら谷・いき引の辻、といの口など云所あり。栗田の方にゆく山の峯道也。又曾根田村より、東北の山のおくを越て、桑野曲の方に下りて、牧の内と云所あり。むかし馬の牧ありしあと、土堤をつき廻せり。

○阿彌陀峯

久光村の内也。是甘木と秋月に行道の岐なり。むかしは此所の上の山、大なる茂山しげなりしが、近古の時老狸すみて、夜陰に人をたぶらかし、阿彌陀の形かたちを現じ光かゝやく、見る人は是を信仰せり。狸の精せいつげて曰、われに人の生精いけにえをそなふべし。我來迎らいかうして其人を淨土におもむかしむべきよし云ける。此地はもと栗田の地にて、久光ひさみつも栗田の枝邑なりしかば、栗田の里民是をおそれ、時々其里人の内うちにて牲いけにえになる人をさだめて、今の通路の西の方なる小山の上に、

壇^{だん}をかまへ、阿彌陀を祭る所とす。夜更阿彌陀現して、彼をなへし人を取て食す。里人は是をかなしみて、或時牲をそなへざりしに、彼阿彌陀大に祟^{たより}をなし、栗田の民共を多くなやましければ、里人おそれて、又牲を時々備けり。或時十二三歳の女子、牲にそなはるに當れり。其時たま／＼御笠郡の獵師來て、是を聞けるが、いかさま是は狐狸の化^{はけ}たるにぞあらん。なんぞ誠の佛には有べきと思ひ、人にしらせず、只一人彼所にひそかに行て、弓矢をたばさみて待居たり。彼ばけ物是をばしらず、牲に備へたる女をとらんとしける所を、獵師是を見て、能引てちやうと射る。あやまたず彼ばけ物にあたる。化物射られながら、後^{うしろ}なる大山に逃げ入りける。あとより蹤^{はかり}血を求めて尋行けるに、山林の内に大なる老狸、矢に當りて死臥たりけるとぞ。それよりして此所を阿彌陀が峯と云由里人語り傳ふ。是宇治拾遺に記せり。山州愛宕山に、狸の化て普賢菩薩に成たるを、獵師の射ころ

したるに似たる物がたり也。

○秋月谷口

依井彌水よいみづは、秋月の谷口也。是より秋月迄の間、兩山の中に廣き谷あり。谷中にある村、其數凡十一、田畠高八千二百三十石あり。秋月より出れば、右の方の山下にある村、長谷山、甘水あまうづ、檜原、隈江、彌永也。秋月より出れば、左の方の山下にある村は、千年、下淵、持丸、菩提寺、大塚、依井なり。秋月町より彌永迄、路程一里八町あり。

○大神大明神 彌永村にあり

延喜式神名帳に、夜須郡おほなむちの於保奈牟智神社に一座とある是也。祭る所の神、則大己貴命也。おほなむちのみこと今は大神大明神と稱す。御社は南にむかへり。東の間に天照大神、西の間に春日大明神をも合せ祭り奉る。宮所神さびて、境地殊に勝れたり。日本紀に、仲哀天皇九年秋九月庚午朔己卯、神功皇后諸國に令して、船舶ふねを集め、兵甲を練る。時に軍卒つどひがたし。皇后の曰

必神の心ならんとて、大三輪社を立て、以て刀矛たちほこを奉りたまひしかば、軍衆自聚るとあり。是は皇后此國に止りまして

新羅かうたんとばかり
たまひし時の事也
おきなをたらしひめの

又釋日本紀に、筑前國風土記を引

て、氣長足姬尊新羅を討んとおぼして、軍士を整理せいり

し、發行したまひし時、軍士共道中にして遁のがる。已

にして其由を占求うらなひるに、則崇たる神あり。名を大三輪

の神と云。此所に此神社を立られ、遂に新羅を平ら

げたまふといへり。則此御社の事也。九月廿三日祭

禮あり。むかしは此日神輿御幸あり。御旅所は村の

西十町ばかりにさやのもと、云所あり、是也。其外

年中の祭禮、たびぐ有しとかや。今はかゝる儀式

も絶はてぬ。然れ共夜須東郡の惣社なれば、其敷地

廣く、産子殊に多くして、人の尊敬淺からず。

○檜原村

此村の森の中に藥師堂あり。むかしは大寺ありて、

是を檜原山、藥師寺、東光院と云しとかや。今も藥

師堂あり。東光院と云僧坊あり。高き所に在り。遠景

よし。田の字に僧坊の名多くありとかや。僧坊にありし櫻とて、今猶多し、春月花盛なる時は賞観すべし。又村の上なる山を、小富士といふ。其形富士山によく似たる故也。

○甘水村

村の東に井あり。是を甘水と云。甘水の事は下産郡の部に詳し。其上

に秋月氏の宅址あり。是別宅なりしにや。秋月より穂波郡君の畑に越行道の左に、白川村とて甘水の枝村あり。其水は甘水へおつ。甘水より一里上にあり。

秋月よりも一里餘あり。其山に櫻かへて鶏冠木多し。此道を花の盛紅葉の秋こえゆけば、すこぶる目を驚かすばかりにて、見るにたへたり。

○長谷山村

むかし此村の向ひの山上に觀音堂あり。故に大和の長谷はせになぞらへ、長谷山と號す。僧坊六區ありしと云。本尊の觀音名作なりしを、天正十五年秋月種實秋月邑を去て、日向國におもむかれし時、觀音の像

をも携行れける。其後村民むかしの事を慕ひ、新に
観音の像を刻ませ、山上の観音堂を山の下に立ぬ。
然れども僧坊もなし。観音堂を守る者もなし。此村
は観音堂よりはむかひ大道の北にあり。観音山の下
には非ず。此村に茶を多く産す。此山中にては好品
也。天和年中、またむかひの山上に領主黒田長重よ
り、観音堂を立たまふ。是前にいひし昔の観音堂あ
りしところなり。

○婦夫石

秋月と彌永村との間の河邊にあり。大石二相對せり。
故名づく。其邊に民家あり。夏月此邊螢火多し。長
谷山村に屬す。又婦夫石と名付し大岩、此郡の栗田
郡、志摩郡吉田村にもあり。奥州會津の志麻郡にも
婦夫石とてあり。二石わかれ立故、はなれ石とも云。
唐土の典籍てんせきべんらん便覽にかける陰陽石といへるも、大石の
二立ならびたるをいへれば、是と同じかるべし。

○秋 月

此所はむかし大倉姓秋月氏の居邑也。相傳へて云、秋月氏は原田氏と同姓にして、其始祖は後漢の献帝けんてい十五代の末孫、阿多倍王日本に歸化し、播磨國明石の近所、大暗谷くらみと云所に著き、終に其所の主となり。大暗谷氏と號し代々相續す。或時天子明石の月御覽の爲行幸ありしに、大暗谷氏參候す。其時明石の近邊に大暗谷と云氏は相應せず、秋月と稱すべしと仰ごと有て、以來代々秋月と號す。後に筑前國に來り此所に住しける故、所の名をも秋月と號しけるとなる。今の邑君の宅即むかし秋月氏の宅地なる故、館屋敷と云。又宮園とも云、或梅林とも云。秋月氏世世此所に住せらる。又野鳥村の内に館園と云所あり。是も秋月氏の住所也とかや。本城は古所山にあり。是秋月氏代々の城也。天正の比種實の時に至て夜須、下座、上座、嘉摩、穗波、筑後國御井、三原、生葉いくは豊前の企救きく、田河、京都みやこ、凡三國の内十一郡を領せり。天正十五年の春、秀吉公筑紫を征伐したまひし時

種實は島津方にて、一旦秀吉公に敵對すといへども終に叶がたく、檜柴と云礮茶壺ちやいれと捧げ降参す。かくて筑紫を平げ御歸の折ふし、此國を小早川隆景に賜り、秋月種實は日向の内にて采邑を賜ひ、財部たからべと云所にうつさる。かゝりければ此所も、農民の栖とぞ成にける。然るに慶長五年、此國を黒田長政公に給はり入國あり。其後秋月氏舊宅の跡宮園に、長政の叔父黒田圖書助を置る。即今の邑君の居給ふ宅地なり。元和九年に長政身まかり給ふ前、遺命有て、夜須郡嘉摩郡、下座郡、三郡の内にて五萬石の地を割て、次子勘解由長興に與へて、領地となしたき旨、台聽に達しければ、上意御ゆるし有て、彼地を長興に賜はる、長興は後に甲斐守に任ず、寛永元年此所に屋宅を立給ひ、家臣の宅も此時立ける。其後やうやくこうしやう工商も集り、民屋多くつらなり町となれり。是よりして又廣邑と成ぬ。此里山林景色うるはしく、薪水の便よく、材木乏しからず。且山中の土産多き事、

國中第一也。海味は、博多並豊前の蓑島、筑後の柳川より来る。谷ふかき山ぶところなれど、能き住家と云つべし。只四方皆山なる故に、山嵐さんらんの瘴氣しょうき深くして、濕しつにあたるうれひあり。且寒氣も又はげし。

此所に出口四あり。北は八町に、西は長谷山口、南は湯の浦に、東は野鳥口なり、秋月の西なる山を觀音山と云。右に云し長谷山村の南の山也。山のめぐり十三町有。他山につゝかす。ふもとより山上七十間ばかりあり。

此山にて秋月をかくし、山の外よりは見えす。彌長の方より谷を上りゆけば、秋月ほどの里はあるべしとも見えす。あだかも隱口の初瀬のごとし。

秋月の土産

此内江川より出る物多し。

木煉柿

味能して京畿の産に似たり。

大栗

丹波の産に似たり。

椎實

楊枝

まつ葉なり。江川より出る。

茶

長谷山上秋月江川に多し。

黄楊木

古所山に産す。

薯蕷

其長人にして味よ

し。且ほして山藥にすべし。江川長野河底よりいづ。

ところ

出所同上。

獨活

出所同上。

蕨

同上。

筍

多し。

葛粉

江川に多し。又嘉

摩都の桑野より来る。

芋

江川に産す。

菰蔞

江川山中に多くうふ。秋月にて製するは、其形他

所の製より甚大なり。江川に製するは黒く大也。

藤天蓼

平蕈

舞蕈

椎蕈

箸ちゆうひ 他所よりすぐれてよし。故に甚多おほくくうる。土産門に詳記す。 鋤くわの柄 上秋月江川より出い。

箕み 持丸村及近村に多く作る。 白砂 古所山より出づ。盆山に用もちゆ備後砂の如し。

小鱈えのほ 江川にあり。 鱒あゆ 他所の産より味よし。國中第一。 鱒腸醢うろちか 味よし。

はへ

右の外山鳥數品多し。又かぶとむし青蟲と云異蟲有。谷川さんせうに鯿魚あり。

古心寺興雲山と號す。秋月邑にあり。臨濟宗大德寺派也。正保四年の春、邑君長興、其先考長政公のために立らる。是よりさき長興、此寺建立の志ありて寺號を大德寺江月和尙に請はる。江月は聞、長政公の追號を興雲院古心道と稱せしかば、それを用て興雲山古心寺と名付らるべしといへり。この故江月示寂の後建立有といへ共、江月を開山とす。長政公の假墓木像あり。五十石の寺産を寄附せらる。長興歿後此寺に葬る。則墓所位牌あり。

大涼寺淨土宗鎮西派 秋月高照院と號す。秋月邑にあり。此寺初は淨仙寺と號して、今の大涼寺の門の向ひに

ありしを、寛永九年に光譽と云僧、今の地にうつせり。後に長興其母公大涼院の位牌を此寺に安置し給ふ。是よりして大涼寺に改む。大涼院の假墓位牌あり。三十石の寺領を長興より寄附したまふ。

日照院天台宗 金寶山來迎寺と號す。先將軍の御位牌を安置し奉り、邑君月毎に拜禮したまふ。且邑君の祈願所也。寺産六十石を寄らる。

湯浦口、秋月士宅の南より、上秋月の方にゆく出口也。むかし此所に温泉ありし故名づく。其地埋もれて、今は温泉なし。又有塚と云所、上秋月八幡宮の邊にあり。湯浦口、有塚など、むかし秋月氏の時、城郭の門の跡ありし出口なり。有塚より古所の城山へ行く道あり。

荒平山、秋月邑の境内也。野鳥村の西にあり。下より四五十間ある山なり。上に宅址あり、なみ隍掘廻せり。城址には非ず。秋月氏家人の屋敷址なりしといふ。但秋月氏の、里城のやうにかまへたる所にして、家

人を常に留守とせし所なるにや。秀吉公九州征伐の時、天正十五年二月六日、此所に二日逗留したまふ。

大龍寺址、秋月邑の谷中にあり。是禪寺にして、開山は嘉摩郡臼井村永泉寺の弟二世泰伯和尚なり。秋月氏世々先祖の墓地たりしとかや。今は寺院もなく、此址のみ残れり。其所に古墓あり。石に龍允珽種居士と刻めり。然れ共いかなる人にや知がたし。又鳴渡山とさん觀音堂の上に秋月氏の墓あり。此所も大龍寺の内也。隆景の家臣手崎東市助いづのの石碑もあり。上の山を大龍寺山と云。

音聲寺眞言宗 鳴渡山南福院と號す。古心寺良にあり。

石體の觀音あり。むかし小貳何某せきふん積憤有て、此石に

踞しりたりし、腹を切て死たりしが、死後に其怨を報じ、

其敵を殺せしと云。又秋月種實の家臣に、惠利内藏助と云者あり。本より武功もありしが、天正十五年の春、秀吉公九州征伐せんとて、下向したまふよし風聞あり。秋月種實は無二の島津方にて、偏に籠城

の用意をせしかば、先いつはりて秀吉に降参の使者を
上せ、其軍勢をうかひ、敵の様を見るべしとて
内藏助を指遣しける。内藏助安藝國廣崎にて、秀吉
公に行合、則陳所に伺候し、秋月種實が使のよしを
申上る。淺野彈正是をとり次、秀吉公聞たまひ、内
藏助に對面有て、秋月は島津と無二の一味たるよし
其聞えあり。島津合體の志をひるがへ翻し、吾身方に参るべ
きとの使ひ尤なり。さあらば、筑前筑後兩國を充つべ
し。汝急ぎ馳下て、此むねを秋月に申べしとの仰に
て、御腰物を下されける。内藏助急ぎ秋月に下り、
種實に此由を申、且秀吉公の軍粧盛さかんなるあり様、大
軍のいかめしき事を告て、降参致べしと申ければ、
種實大にいかり、汝は秀吉に謀られけるよな。吾は
島津と七代までの知音なれば、其義を變へんじいかでか
秀吉には馬をつなぐべき。いと片腹痛き事哉とぞ笑
ひける。内藏助此由を聞、秀吉公の勢てきひ敵し難き由
を、つぶさに語りければ、種實及家臣等皆是を聞て

あざけり、偏に内藏助が臆病にて、かくはいふぞと
わらひける。内藏助是を聞、以後に思知べき事なが
ら、當時の面目を失ひける事をいきどほり、此石に
こしかけ 踞自殺しぬ。其石今は堂の中にあり。高二尺ばか
り。是を本尊として観音と號す。誠に此石は忠臣の
こしかけ 踞て自殺せし石なれば、心ある人は哀あはれを催すべき
事也。され共是を観音として拜するは、理なき事な
りし。観音堂の前に小川の流れありて、常に水のな
る音あれば、鳴音なるとと名づけ侍りしにや。又音聲寺の
前に大石あり。長四間二尺、横三間あり。其上まる
く廣くして、山形に似て、さながら削けりなせるが如
し。

○上 秋 月

上秋月八幡宮は、秋月及上秋月の産靈うぶすななり。神殿は
上秋月の高き岡の上にあり。此山、秋月氏の時、其家臣坂
田氏代々の居城也しとかや。
高き石階を登て御社に至る。祭る所神、三座、中座
に八幡大神、東座は住吉大明神、西座は武内大臣、

宮立は南に向へり。後深草院寶治年中初て此所に祭ると云。末社二區あり。左の末社は 天照大神、右の末社は豐受大神也。とようけ又橋より東の一社松尾明神、同東の一社祇園を祭る。社前に石の鳥居及御池あり、橋あり。九月十五日祭禮を執行ふ。此時神輿御旅所に御幸有。神樂所は中道にあり。又此日拜殿の前にて猿樂あり。但隔年に是を取行ふ。いにしへは流鏑馬有しが、今はなし。六月晦日夏越なごしの祓あり。其敷地の内に生れし人、鎮祭とて同二十七日より齋戒さいかいして、身心をきよめ靜にして、此社に參詣す。神領十石、邑君より寄進したまふ。秋月の里も此神の敷地なれば、士民其產子うぶこにして、領主を始め諸人皆尊仰す。

○切 殘 山

上秋月村の内、永谷と云枝村にあり。其めぐり田也。故に其山は島の如し。東南の方さがしき岩山にて、高十二三間ばかりあり。西北は土おほへり。ふもと

のめぐり百五十間許あり。山上には松其餘の衆木生しげれり。其岩は灰のかたまれるが如くにして、やはらかなる故、斧にて切わりて、井筒とし、ふみいし蹈石とす。或は桶の形箱かたちのごとくに切て、つゝじなどの小木をうへ、草花をうふ。

○江 川

秋月の川上、深山の狭せまき谷中に七村あり。下戸河内、尾根、井口、大河内、高野河内、鱒歸、瀧ありて是より上に鱒のぼらす。栗河内なり。下より上の序ついでかくのごとし。此七村をすべて江川と云一村とす。皆一河内の上下にあり。其長さ一里半あり。其川上は、上座郡塔の瀬小石原也。彌永より小石原の奥まで、谷中の長さ凡六里許あり。國中谷深き所多けれど、是にしくはなし。鞍手郡大賀畑も是につげり。那珂郡の五箇山、上産郡の寶珠山、佐田山、御笠郡の平等寺、夜須郡の三箇山、糟屋郡井野谷、怡土郡井原山は皆又それにつげり。江川の山中に土産多し。秋月に出す所の品々は

秋月の内にすでに記せし故こゝに載ず。のせ國中所々山中の村里多しといへど、此山中の土産多きに及べからず。秋月に土産多きは、此地より出れば也。谷中狭く、せは田畠すくなき故、七村を合せて田畠高百七十石あり。されども山中に土産多くして、かて糧ともしからず、薪を切て毎日秋月へ出しうる。山林の利多き故、人數男女七百口ばかり居れり。上秋月も山中にあり、他里にくらぶれば、山林の利ともしからざれ共、江川には及ばず。其故に高千五百石ありて、人數は江川に同じ。其外平原へいげんの里は、猶人數すくなし。凡山中は寒濕ふかく、萬の民用自由ならずといへども、山林の利多くして、飢饉をまぬかるゝに便よし。是山中の民の平原にまされる處也。此地にかぎらず、凡山中に人口馬數多きは此故也。

○荷持村

秋月の東古所山の麓にあり。日本紀、神功皇后の紀に、のとりたの荷持田村に羽白熊鷲わしと云者ありとしるせしは、此

所の事なるか、然れども決定し難し。今は野鳥村と云。此所にも秋月氏の隱居所なりしとて、館屋敷と云所あり。畠と成て三段許あり。又荷取と云所、上秋月村にあり。枝村なり。民家少あり。是今はにとりと云。むかしの荷持なりしにや、いぶかし。又嘉摩郡大力村にも、荷取と云ふ所上下村あり、是も秋月の東の山を越て東北にあり。

普明院天台宗 荷持村にあり、是古所山白山權現の社僧のすむ寺也。

○古所山

荷取村の上にあり。高山也。秋月の東にあり。其間少隔れども、山高き故、秋月の上にそびえて、さしかゝりたるやうに近く見ゆ。又白山とも、白髮岳とも號す。山上に白山權現の社あり。野鳥村の五町上に鳥居あり。凡此上に登るに道二筋あり。荷持村より直に谷川にそひて本道を登れば、其間道さかしく水石多く、艱難甚し。荷持村より白山の社に至て二十

八町あり。又北の方より廻り登る道あり。道けはしか
らずして躋易し、是を鹿廻りと云一里餘あり、遠し。
又秋月府君の館より、すぐに古所山に登る道あり。
山の尾に登る最下なる山を節尾と云、館の正上なり。
其上三段ばかりに、むかしの宅あり。秋月氏の城
址は、權現の社より西の方一町許下に在。城の後に
大なる岩あり。その石に蠣殻多く附り。凡高山にか
きがある事、日本にも唐土にも多し。筑前の内に
も猶あり。かゝる高山の上にかきがある事、甚あ
やしき事なれども、古人の説もあれども、其説長け
ればこゝにしるさず。城址の下一町許に出泉あり。
甚清冽にして、大暑にも涸れず。里人の説に、一日
夜に千人を養ふべしと云。是城ありし時の用水也。
古所山西の方十町餘、下に僧坊の址多し。山上白山
權現の社の後、數丈の間に國見岩あり。其形奇怪に
して、形容し難し。山谷の形多し。其石の傍に御手
水とて水あり。常に水たまりて、暑月といへども盡

ず。うたがふらくは是石中におのづから出る泉なるか、此岩の上に登臨するに、眼界甚廣くして、近國皆一望の内にあり。佳觀をきはむ。其所より、東の方を下る事五町ばかりの間、岩石重疊して、其道艱難也。岩木に攀縁て下る。其危險にして悞るべし。

其石の形、大に奇異にして、長苔多し。上には樹木多く茂りて、暑月といへどもかげすゝし。其中大岩の間に身を側て、入所一間許あり。其下にも大岩あり。又其下に石窟あり。是を奥の院と云。山伏の修練する所にして、符札多し。其所を出て、又其下下る事十四五間に大石二あり。各高さ七八間も有べし。其間わづかに身を容るべし。横に深く入事八間ばかりあり。上古は石なし。其奥右に屈曲する事三間許に石穴あり。白日といへどもくらし。燭を燃して入る。其奥せばくして入べからず。權現の社より此所の間、大なる黄楊木多く生じて甚うるはし。又岩上に石茸多し。およそ此山奇絶の佳境にして、世

にまれなる勝地なり。

○八町越

此所山路の峻けはしき所を八町通る故、八町越といふ。いにしへより名ある要害也。寛永七年に、邑君長興、家臣足輕の司安倍惣左衛門一任に命じて、右八町の道をふさぎ、新に道を切開かしむ。翌年に至て其功なれり。是を新八町越と云。是肥後、肥前、筑後より秋月に來、此道を越えて、嘉摩郡千年町、大隈町をへて、豊前に通る大路也。故に近國の大名も、江戸往來に此道を通る人多し。又八町越の中途より、北の方に轉てんじて坂をこえ、君が畑を過ぎ、飯塚へゆくも大道なり。又新八町越を初て開きし時、千年町を新に立て馬驛とす。秋月より千年町迄二里十四町、千年町より大隈へ一里あり。又秋月より飯塚へ五里、此間馬驛なし。

筑前國續風土記卷之十終